

## 【一般講演2】 第8席

## 「『甲乙經』卷之三における灸の壮数について」

神奈川 上田善信

古代中国における鍼治療と灸治療の比重をみると、『素問』『靈樞』では鍼治療の記載が多く、『難經』でも専ら針だけで灸への言及は全く見られない。他方、馬王堆出土の脈書には灸治療の記載しかなく、また隋唐の医書でも鍼治療に比べて灸治療の記載が極めて多い。鍼灸の歴史において、鍼灸治療がほぼ灸治療であった時期があるといつても過言ではない。

灸治療では、その刺激量とりわけ施灸の回数が要素として重要である。そこで今回は『甲乙經』を通じて壮数の基準を考えてみることにする。『甲乙經』は伝承された鍼灸専門書の中でも最古の文献であるが、特に経穴書としての意義が重要で、卷之三には現在使用されている経穴の大半が記載され、各穴ごとに施灸の壮数が示されている。『素問』『靈樞』あるいは隋唐時代の資料に比して最もよくまとまっており、壮数の問題を全体として考えていくための最良の資料である。なお検討に際しては『甲乙經』を引く隋唐の諸資料などとも対照し完全を期すようにした。